

## アラブ世界研究所 1987年 ジャン・ヌーヴェル

### 異文化の特質抽出と空間化

フランス革命200年を記念して、ミッテラン大統領時代の1980年代、パリの都市再生計画と9の文化施設を建設するグラン・プロジェクトが実施された。ルーブル美術館の大改造や新国立図書館、オルセー美術館、ラ・ヴィレット公園などだが、アラブ世界研究所もそのひとつである。

フランスとアラブ18か国(当初)が協力してアラブ世界の文化、精神世界を研究し、情報発信する機関であり、フランス、欧州とアラブの文化交流の促進を目的とする。そのため、常設のアラブ美術・文明博物館を中心に、ふたつの企画展示室や公共図書館、会議室、400席の講堂、事務室の他にレストランやカフェも設けられた。

ジャン・ヌーヴェル設計で、完成は'87年。

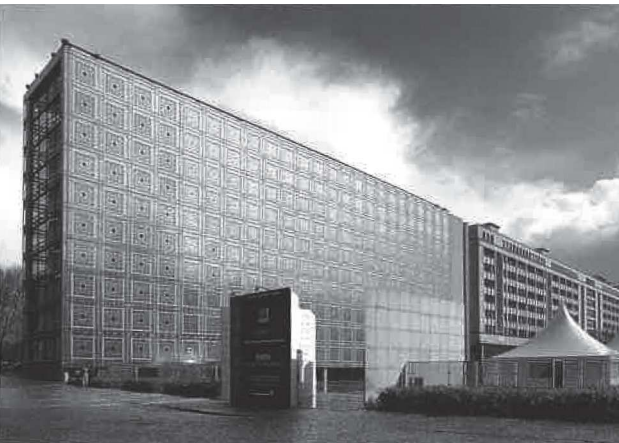
場所はセーヌ左岸、カルチュ・ラタンの東部、近代建築で校舎・研究棟を構成したジェシュ大学キャンパスの最北部。下りくるセーヌ川がサン・ルイ島にぶつかり左にカーブする変曲点、それに沿うサン・ベルナル通に面し、西端はサン・ジェルマン大通りとの交差点に接する。

大学校舎側のフラット立面の南棟と道路沿いの緩いガラス曲面の北棟の接近する2棟からなるが、昇降機や階段を集中配置した東側のコアで繋がっており、5階の奥には中庭コートを内包する。パリ中心部の規制に従い高さは旧市街のアパート同様に中層。南棟には主に図書館や会議室、事務室、ふくらみのある北棟には常設の美術・文明博物館を収める。講堂は大学校舎との間の広場の地下にある。北棟は2層分低く、屋上は眺望のよいテラスでカフェがあり、ノートルダム寺院やパリ中心部を眺められる。

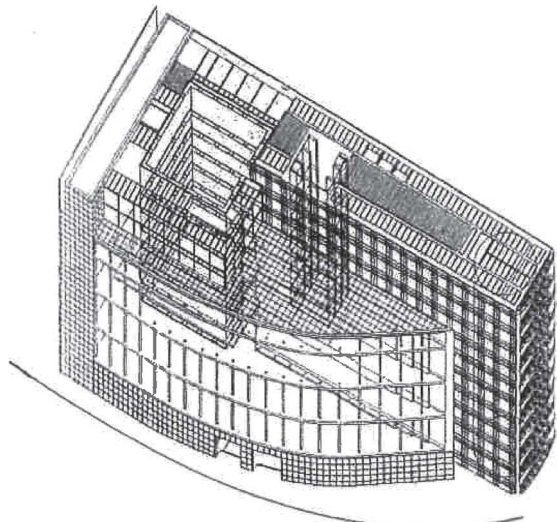
コアのある東側を除き他の壁面は方位により異なるガラスで覆い、光熱量を調節している。南面のガラス壁全面にカメラの絞り機構を応用した光量自動調整装置を付けている。筆者が訪ねた時には故障していたが、一種のスクリーン機能は果たしており、アラブの町家の窓に付けられた適度の遮光と微風を通す建具・マシュラビーヤを思い出させる。中庭コートに面する部分も2重皮膜で、ここにはガラスと白大理石をスライスした薄い正方形切片を金物で繋ぎ合せた精巧なスクリーンで覆っており、透過した光は室内に浮遊感を生む。展示品のアラブの繊細、精妙な美術工芸品が放つ香気と一体化して、穏やかな光漂う神秘的とも言える空間を現出している。

5階の中庭コートは特定の活動用でなく、自然採光のためと思うが、アラブの伝統的な住居のパティオに通じる。

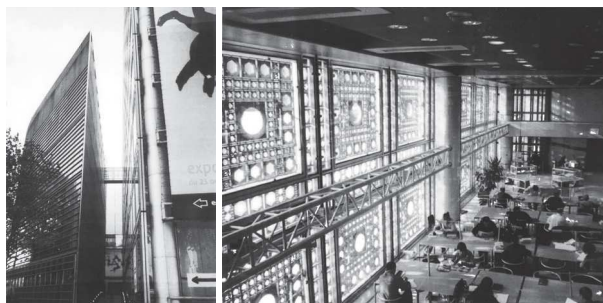
都市の文脈、場所性を活かし、アラブ・イスラムの建築文化への敬意を基に、とりわけ光の扱いの特質を抽出しての現代建築への翻案、適用が秀逸である。



南西からの外観 ガラス面背後に光量自動調整装置が付いている



全体構成図 曲面側がセーヌ川に面する



左上 西側から2棟を見る(間は約3m) 右上 図書館 ガラス面に光量自動調整装置 左下 5階中庭コート 白大理石切片スクリーン 右下 美術展示室 吹き抜けている